現代劇選集

津上忠

現代劇選集

津上忠

青磁社

津上　忠（つがみ　ただし）
一九二四年生れ。劇作・演出家。
著書に『津上忠歴史劇集』（未来社）『演劇と文学の間』（光和堂）『歴史小説と歴史劇』（新日本出版社）等がある。

現代劇選集

発　行　一九八四年十二月一日
著　者　津上　忠
発行者　阿部慶司
発行所　青磁社
東京都千代田区神田北乗物町一七北乗ビル　〒一〇一
電話　〇三（二五六）八四二五　振替東京四―一七六一二一
印刷所　新協印刷株式会社
製本所　戸部美術製本
定価　二、〇〇〇円

目次

エリザベス・サンダースホーム物語
——ママちゃま——　3

巷談　本牧亭（安藤鶴夫・原作）　77

ずばり東京（開高　健・原作）
——見た、聞いた、泣いた——　127

あたしゃ一代　175

早春の賦
——小林多喜二——　225

初演時スタッフ・配役表　301

あとがき　308

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

エリザベス・サンダースホーム物語

――ママちゃま――

登場人物

沢田美喜
警官　一
　　二
老　爺（列車の乗客）
間　宮（保母）
母　1
野　本（保母）
木　山（保母）
中　江（保母）
森　　（保母）
中　田（牧師）
母　2（川村キク）
リリーの子供時代
ミヨコ（子供）
黒人G・I
日系二世G・I　一
　　二
　　三
黒人G・Iジョン
おとよ
山　崎
黒人G・Iトム
母　3（木村よし子）
教育委員
F・T・A役員
ジロー
ロ　イ
リリー
ジェシー（リリーの子供）
井　上
伊　丹
村　山（女教師）
河原崎国太郎
ほかに夜行列車の乗客多勢

場割り

プロムナードI
プロローグ
一ノ1　夜行列車の内部
プロムナードII
2　エリザベス・サンダースホームの離れ
プロムナードIII
3　エリザベス・サンダースホームの事務所
4　(A)エリザベス・サンダースホームの事務所
　(B)同・入口のトンネルの内部
　(C)(A)に同じ、ホームの事務所
プロムナードIV
二ノ1　前場に同じ、ホームの事務所
プロムナードV
2　ホームの離れと居間
エピローグ
　鳥取浦富海岸にある沢田家の別荘と外の浜辺

開幕前プロムナードIの口上

開幕ベルとともに緞帳あがる。
スクリーンに、一九四五年十二月の帝劇における前進座公演の「ツーロン港」「鳴神」を上演したポスターの拡大写真が映し出される。
客席、明るいままで――
国太郎、スクリーン前に登場。

国太郎談　みなさん、こんにちは、よくおいで下さいました。わたくし河原崎国太郎でございます。さて、ここに写しましたポスターは、いまを去る三十八年前ということになりますか。終戦の年の十一月二十四日から翌十二月の二十日まで、わたくしども前進座が帝劇で公演いたしましたときのポスターでございます。このとき、ごらんのとおり「ツーロン港」というフランスの翻訳劇と、歌舞伎十八番「鳴神」が演し物でございました。

次いで、国太郎扮するところの絶間姫の舞台写真にかわる。

国太郎談　わたくしはこのときの「鳴神」の絶間姫の役をつとめましたが、実はこれが、これからはじまる「ママちゃま」の主人公沢田美喜さんとかかわっているのでございます。と申しますのは、わたくし、沢田さんとはそれ以前の八年ばかり前に、はじめておあいいたしまして以来、御夫君の、のちに国連大使をつとめられた沢田廉三氏ともどもおつきあいさせて頂いておりました。美喜さんは、お芝居の好きな方でして、この帝劇のときも見にこられました。そういう方ですから、この写真にあります、わたくしの絶間姫の衣裳の帯も、実は沢田美喜さんから、それ以前に頂いたものなのでございます。それというのは、戦争前に御夫君が外交官として勤務地の外国でレセプションを催すときに、美喜夫人はよく丸まげの着物姿で出席なさったそうですが、そのために何か奇抜な柄の帯をといって、当時の三越の衣裳部に注文してつくったのがこの帯なのでございます。これはもともと六代目菊五郎が市村座で使った「戻り駕籠」のかむろの帯で、黒繻子の地に柴垣の菊という柄なンです。それが戦争となって沢田さんが外国から引きあげてきたものですから、

美喜夫人は「もういらないから……」といってわたくしにくれたのです。この帝劇のときはまだ終戦間もない頃でしたから、衣裳屋さんのほうでいい帯が揃えられなくて、それで、しまいこんであったこの帯のことを思いだして使ったのでございます。まあ、沢田さんのことでわたくしがまず第一に思い出すこととしてお話しいたしました。エリザベス・サンダースホームのことも実際に行っていろいろとお話をうかがったことがございますが、前置きはこのくらいにして、まずはごゆるりと御観覧のほどを。（退場）

プロローグ

暗いなか――原子爆弾の破裂する閃光と、それにともなう爆発音が場内を揺がすように鳴り響く。その轟音が尾を引くなかで、スクリーンに、中天に舞いあがる原爆のきのこ雲が映しだされる。次いで、被爆者たちの阿鼻叫喚の声、声――和す。スクリーンに広島、長崎の焼跡が映しだされる。つづいて飛行機の爆音と、その着陸音――スクリーンに、マッカーサーが厚木飛行場におりたつ姿が映しだされる。「星条旗よ永遠なれ」の音楽――スクリーンに、アメリカ進駐軍の行進。白人兵、黒人兵の顔、顔――軍靴の足音が和す。クロスして「リンゴの歌」のメロディ。スクリーンに、アメリカ兵と戯れる街娼たち。つづいて、食糧の〝買い出し〟列車をおりる（あるいは乗る）人たちの群れ――やがて、消える。

一ノ1

暗いなかで列車の走る音（車外―車内）。スクリーン、とんで、舞台が明るくなってゆく。車中の座席に坐る。沢田美喜（四十五歳）がスポットで照しだされる。

美喜の声　あれは、終戦から二年目の一九四七年の二月――特攻隊から復員したわたくしの二男が、京都の大学に復学して、その下宿の相談のために、京都行の夜行列車に乗っていたときでした。

全体に明るくなるとその周囲にいる数人の乗客とともにライトで見せ、窓外の夜景の灯の点滅、も

しくは移動によって列車が走行中であることを思わせる。上の網棚には、買い出しのリュックや風呂敷包みが置いてある。

美喜、何かもの思いにふけっている態で——

美喜の声　わたくしは眠れないままに、あの二男も、もう何カ月か戦争が長びいたら、特攻隊だからおそらく生きて帰ってこなかったろう……。それにつけても、海軍に志願した三男は外国で教育を受けたため、その語学力を買われ通訳として南方へ送られる途中、インドシナ沖で戦死……。かわいそうなことをした……。これが敗戦国の女というもの、母というもののみじめさ、宿命かと……。そんなあれこれの思いをあらためて嚙みしめていました。

列車が急停車する。そのショックで眠っていた乗客が眼をさます。あるいは窓外を見すかす者あり。と、突然「警官だ」「米の検査だぞ」という声とともに乗客たちのざわめき声が大きくなる。美喜の周囲にいた乗客たちのなかで、慌てて網棚の荷物をとって座席の下に隠す者、あるいは素早く逃げ出す者あり。窓ガラスを割る者。喧騒の人声——一段と高まる。やがて警官一がやってきて、美喜のそばに立つ。ふと網棚に残っている風呂敷包みの荷に気づき、手でさわってみる。

警官一　この風呂敷包みは誰のですか？

周囲を見回すが、誰の返事もない。

警官一（荷を下ろしながら）持ち主がいないなんておかしいじゃないか……。（手の感触で中味を不審がる）おや……（いやな匂いがするらしく）変な匂いだな。

風呂敷包みを解くと、中から新聞紙の包みが出てくる。それにかけてある紐を解こうとするが、ほどけないのでポケットからナイフを出して切る。油紙の包みとなる。

警官一（開いてみて驚く）ああ、こりやァ……。

周囲にいた乗客たち、その声につられて覗きこむ。

乗客一　あ、赤ン坊の屍体だ……。

乗客二　なに、赤ン坊の屍体だって……。（思わずそばへ行ってみる）ほんとだ、しかも、こりやァ黒ン坊じゃないか。

美喜、これも思わず覗きこみ、呆然として見つめ

る。

乗客一　うわァ、臭え……。こりゃたまらねえや。（鼻をつまみながら、はなれる）

警官一　ふむ、誰だ、こんなことをしたのは？

乗客二　いや、おれじゃねえよ、おれにはかかわりねえ……。（はなれる）

警官一、周囲を見回し、見つめている美喜に疑いの目を向けたかと思うと——

警官一　（大声で）貴さまッ、このパン助めッ。

美　喜　えッ、パン助……。

警官一　こんなことしくさって、よくも図々しく黙っていられたもんだ。

美　喜　何ですって……。じやァ、わたくしが……。

警官二　とんでもない女だッ。いいからおりろ。（手をとろうとする）

美　喜　（その手を払いのけ）何をするんです、失礼なッ。

警官一　なにィ……。なんだ、いまどきそんななりをして。（美喜の手にした洋書をとりあげ）こんな英語の本を持っているのが何よりの証拠だ。

美　喜　（落ちついて）ああ、それでわたくしのことを……。

乗客一　なるほどねえ。いい年こいて日本人の面よごしだ。これだから戦争に負けたんだ。

乗客二　まったく、たいした大年増だぜ。

警官一　（美喜に）さ、申し開きは駅におりてから聞こう。こいッ。

美　喜　待って。そうあなたが思いこんだら、いくらここでわたくしでないといっても納得しないでしょう。ですから、これ以上は弁解いたしません。

警官一　うむ。いい覚悟だ。

美　喜　ただその前に、この列車のなかにお医者さんが乗っているでしょうからスピーカーで呼んでみて下さい。

警官一　そりやァ、どういうことだ？

美　喜　（赤ン坊の屍体を指して）ごらんなさい。この赤ン坊、おへソの緒が落ちたばかりで絆創膏が貼ってあります。この子は生れてまだ二週間とたっていません。わたくしの体が二週間以内に子を産んだかどうか、診てもらうのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

警官一　ふむ、しかし……。

美　喜　なんならわたくし、この場で裸になって診てもらってもようございますのよ。

乗客一　ひゃひゃ、そうしろそうしろ。

警官一（驚いて）えッ……いや、そんなこといっても……。

美　喜　さア、お医者さんを呼んで下さい。

乗客二　こりやァ面白くなってきたぞ。おまわりさん、その女のいうとおり医者を呼んでやれや。

　そのとき、実直そうな田舎風の老爺の乗客が出てくる。

老　爺　おまわりさんよ、わしは見とったがなァ。静岡から乗って名古屋でおりた女が怪しい。わしの横を通ったとき、確かにこの風呂敷包みを持っとった。置き捨てにしたのは、あの女にちがいない。

警官二　爺さん、そりゃ、ほんとかね？

老　爺　ああ、ほんとうだとも。年とってもわしの眼は確かや。

警官一　そうか……。そうなると、その女かもしれない。いや、その女にちがいない。（急に態度をかえ、美喜に）どうも、失礼しました。

　風呂敷包みを持って、そそくさと去って行く。

老　爺　アハハハハ、いや、よかった。

美　喜　おじいさん、どうも有難うございました。（頭を下げる）

老　爺　なァに、わしはこの眼で見たままのことをいうただけや。それにしてもあんたはたいした女や。（床に落ちている洋書を拾いあげ、見て）なんや、こりやァ、バイブルじゃないか。

美　喜　あ、それ……。

老　爺　ああ、あんたのかい。（渡す）

美　喜　じゃ、おじいさんも……。

老　爺　いやいや、わしはキリシタンやない。

美　喜　キリシタン……。

老　爺　なァに、田舎爺いでもその本が聖書やということぐらいはわかるわ。

美　喜　どうもすみません。

老　爺　いやいや。それにしても混血児（あいのこ）を産んで、死なして捨てるなんて痛ましいこっちゃ。

美　喜　はい、ほんとに……。

汽笛の音、列車がゴトンと揺れるにともなって乗客たちの体も揺れる。

列車の走り出す音（車内）。美喜だけをスポットで残し、周囲、暗くなる。

美喜の語り（座席を立って舞台前の片隅へと歩きながら）わたくしは、これ以前に、ああいう黒い肌白い肌の混血の赤ン坊の屍体が川っぷちや町中の裏通り、あるいは駅の待合室に捨ててあるのを見たことがあったのです。

スクリーン、おりる。

美喜の語り　そして、いまもまたです。いくら戦争に負けたからといって、こんなみじめなことが巷に横行していいものだろうか。理由はどうあれ、この世に一度生をうけた以上は尊い命なのではないか……生れた子にはなんの罪もない、それなのに……。それやこれやを自問自答しているうちに、わたくしの脳裡に、ふとひらめいたことがあったのです。それは、かつて夫にしたがってイギリスへ行ったとき、親のない子をひきとって育てていたドクター・バナードス・ホームという養護施設に、わたくしが手伝いにいった体験です。

「そうだ、あれだ、あれをやろう」、そして、ああいう子たちの母になろうと。

暗転

暗転中のプロムナードⅡ

スクリーン前のいっぽうの片隅に、国太郎がスポットで照しだされる。

国太郎談　この決心を、美喜さんはさっそく夫の廉三氏に打ちあけ、また父君の岩崎久弥氏にも相談したそうです。その結果、お二人から「思いどおりにやりなさい」と励ましをうけ、美喜さんは大磯にある岩崎家の別邸を子どもたちの施設にあてようと思いついたのです。ところが当時、財閥解体という措置によって、この大磯の別邸は進駐軍が接収して日本政府の所有物件になって売られようとしていたンですねえ。さァ、そうなると変な話で、もともと自分の家だったものを買いとらねばならない。美喜さんは毛皮のコートやら、宝石類、骨董品などを手当り次第に売ってお金をつくり、借金もして、やっとの思いで買いとったのでし

た。いわば女の一念とでも申しましょうか。そして、まず二人の捨児を預かってやりはじめたら、たまたま美喜さんが長年信仰してきたキリスト教の聖公会を通じて、エリザベス・サンダースというイギリスの御婦人の遺言による五万円ほどの寄付があった。それで、その方の名をとってホームの呼名とし、教会の事業として発足させたのです。（退場）

2

前場から三カ月ばかりたった晩秋。

舞台、明るくなると、そこは沢田美喜の居室であり、兼応接室である。もともと岩崎家の別荘をこれにあてたのだから、写実的に書けば、日本建築の数寄屋造りで、回り縁のある母屋と渡り廊下で通じる〝離れ〟の一部にあたる。

前の庭を行くと、いっぽうは母屋からトンネルのある門前へと通じ、いっぽうは茶室（のちに隠れキリシタンのコレクションを入れる小堂）、子どもたちの遊ぶ運動場があり、家屋のうしろには小高い丘の山肌が迫っている。その丘の上には、のちに子どもたちの寮や学校が建つようになる。正面の前方には、相模湾から遠く太平洋の海を眺望できる。

しかし、舞台装置としては、こういう写実を基礎とするも全体に簡略化をする。つまり地舞台を庭として一段高い二重台を屋内とする。正面は壁で、片方に奥へと行く通路を設ける。ただし、室内には全体に絨緞を敷き、園長用のデスク、応接用の机、椅子、ソファなどをおく。また正面の床の間と覚しきところを十字架像のある祭壇となし、ほかにいくつかの隠れキリシタンの遺物を適宜飾りおく。またひときわめだつようにローランサンの絵を掲げる。

以下、同じ場は、二重台の角度を適宜かえて見せる。それにともない小道具の位置をかえたり、新しくつけ加えたりして、場面を変化させるものとする。

舞台、明るくなる——。

昼下がりの時刻。

静かな波音と、ときどき、近くの駅を発着する列

車の音が聞こえてきたりする。
室内には、保母の野本（中年過ぎた感じ）が、デスクを前にして、帳簿を見ながら算盤をはじいている。
やがて、卓上の電話が鳴る。

野　本（受話器をとり）はい、エリザベス・サンダースホームでございます。……え……ああ、園長は東京へ出かけて留守なんでございますが……わたくし、野本と申しますけれど……。なんだ、教会の中田牧師さんですか。どんな御用で？　はい、三時頃までには戻ると存じますが……。はい……では、その頃に……ごめん下さいまし。
受話器をおく。そして、何か用事を思いだしたらしく、奥へと去って行く。
また電話が鳴る。しばらく鳴りっ放しで、舞台空虚――奥から、慌てて間宮が駆けつけてきて、受話器をとろうとするが、そのとき鳴りやむ。

間　宮　あら、切れちゃった……。
森が赤ン坊を抱いて、母1とともに奥から出てくる。

母　1　ミヨちゃん、よかばいね。きれいにしてもろおて……。

森　シラミだらけの髪の毛も短く切って洗ったから、もうカイカイしなくていいのよ。（手にした紙包みを出し）さ、この子の髪の毛よ。

母　1　はい。（受け取って）ほんなこと、ありがとうございました。

間　宮　子供さんを手放せば、あなたも働けるはずよ。仕事のことは、また横浜の児童相談所に戻って頼みなさいね。

母　1　はい、そういたしますばい。
もう一度赤ン坊を抱いて――

母　1　ミヨちゃん、幸せにね。
つと落ちる涙を拭う。

間　宮　さ、早くいかないと日がくれるわよ。

母　1　はい。
森、赤ン坊をうけとる。

母　1　お世話になりました。
一礼して庭を去っていく。見送る間宮、森――。

森　ただ一度、アメリカ兵に暴行されただけで、こんな

子を産むなんて……。

間　宮　それも、リチャードという男の名前だけを頼りに、長崎から探しにでてきたというんじゃ、わかりっこないわ。

森　ほんとに……かわいそうというより、なんだか腹が立ってくるわ。

間　宮　そうねえ……。

赤ン坊、泣く。森、あやしながら奥へ。

野本が木山と連れだって戻ってくる。

間　宮　野本さん、デスクをはなれちゃ困るじゃないの。さっき電話があったのよ。

野　本　あら、そう……それで？

間　宮　とろうとしたら切れちゃった……。

野　本　それがどうかしたの？

間　宮　ほんとはあたしが電話番ですけど、あなたがここにいるっていうから子どもたちを見に行ってたんじゃないの。

野　本　大丈夫よ、またかかってくるわよ。

間　宮　でも、もしいまの電話がママちゃまだったら、帰ってきて怒られるのはあたしですからね。

野　本　いいの、いいの、気にしない……。

間　宮　そりゃ、あなたは親御さんが岩崎家の料理方として働いていた縁でこのホームにきたのですから、いわば、ママちゃまのお嬢さま時代からのお相手……。

野　本（うけうりで）あたしはもともと聖路加病院の看護婦をしていて、ここにきたんですからあなたのようにいかないわ。こういいたいんでしょう？

間　宮　まァ……。

野　本　そのときは、ちゃんとあたしがいいわけをしますから、大丈夫よ。

間　宮　でもね……。

野　本　もういいじゃないの。

木山、二人のやりとりを見て、思わず笑いだす。

野　本　ほら、若い木山さんに笑われてるじゃないの。

間　宮　木山さん、何がおかしいのよ。あなたはナースとしても、このホームの保母としてもあたしの後輩なのよ。それを笑うなんて失礼ですよ。

木　山　はい、申しわけありません。（頭を下げる）

野　本　それより間宮さん。子どもたちのミルク、もう一週間分もないのよ。

間　宮　えッ……それ、ほんと？

野　本　いま木山さんに調べてもらったんだけど……。

間　宮　そう……。

木　山　何しろ配給だけでは足りないし、子どもの数も三十人越えてしまってますからねえ。

間　宮　そうなると、ヤミ屋に頼んで進駐軍の横流しものを買わなきゃァならないわ。

木　山　でもヤミ屋のもの、高いでしょう。

野　本（計算したメモを見せ）調理場のほうの今月の支払い、これだけあるんだけど、お金のほう大丈夫かしら？

間　宮（見て）ヤミのミルク買わなければ、お支払いできるけどねぇ……。

野　本　こうなるとママちゃまじゃないけれど、明日は明日の風が吹くと思わなきゃァ、この仕事やっていけないわねぇ……。

間　宮　それより、あたし心配なんだけど、今日のママちゃまが出かけたGHQ（アメリカ軍総司令部）の呼び出しね。

野　本　ああ、それそれ、あたしもよ。

間　宮　この間、厚木基地の将校夫人たちを代表して、ジョンソン少佐夫人がここにきてね。いままで贈ってきてくれていたミルク・古着・食料など、もう今後は援助できないというのよ。どうもアメリカ軍の上の方から何かいわれたらしいのね。

野　本　そう、そんなことがあったの……。

間　宮　おそらく、今日の呼び出しは、それと関係あると思うの。

野　本　ああ、それであなた、電話にピリピリしていたのね。

間　宮　そうよ。ママちゃまは何かあったら電話するからといいおいていったのよ。

木　山　まさか、ママちゃまが……ほら、よくいうじゃないですか、占領なんとかいう……

間　宮　占領政策違反……。

木　山　そうそう、それになるようなことにならないでしょうね？

野　本　冗談じゃない、このホームの仕事は占領軍の尻拭いをしてるようなものよ。

木　山　あ……そりゃそうですね。じゃ、そうするとあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com